

社報 御霊本宮

第72号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
2月15日

井戸の神様

二月十八日は二十四節氣のひとつ

で「雨水」です。暦便覧には「陽氣地上に発し、雪水とけて雨水となればなり」と記されています。雪が雨に変わり、氷が解けて水となる頃をいいます。

暦便覧とは、江戸時代の中期から後期の常陸国宍戸藩五代藩主である松平頼救が、著者となっている暦の解説書です。この人は隠居して太玄齋を名乗っていました。

地域によっては、まだまだ降雪や積雪がありますし、逆に桜が咲きだす地域もあります。春の訪れを感じさせる言葉ですね。

水といえば井戸を思い出します。子どもの頃は水道がなく、井戸水を汲ん

では台所の甕や風呂にいれていました。夏の井戸水は本当に冷たかったですね。スイカを冷やしてよく食べていました。

さて、井戸にいる神様を照会しましょう。神様の名前は古事記では弥都波能売神、日本書紀では罔象女神と表記されています。神社の祭神としては水波能売命とも書きます。本社の御井神社の祭神は水波能売命です。

ミズハノメという名前から女神であることが分かります。人の前にあらわれる時には、麗しい乙女の姿をしていたということです。

ミズハノメは「水が走る」または「水が這う」という意味で、もとは流れる水、つまり川の神様でした。太古、治水は生死にも関わる重大事で、洪水を起ささないように神を祭って祈りました。また農耕には雨とともに日光も



必要です。祈雨はもちろん、祈晴もミズハノメに頼ったのです。雨をもたらすばかりでなく、ときには雨を降らせない靈力も必要でした。

古代の日本では地面に縦穴を掘って作る井戸はなく、現在のよう形式の井戸が一般的に利用されるようになったのは江戸時代からだと言われています。それまでは川をせき止めたり、山などに自然に湧き出している湧き水を汲んだりして生活用水としていました。

井戸が掘られるようになってからは生活に欠かせない水を供給する場所として井戸は神聖視され、水の神であるミズハノメは井戸の神としての側面も持つに至りました。

宇智郡 狛犬めぐり

須恵町 統神社

統神社

には三対の狛犬（一対は狐）

があります。すが、今回は社頭の狛犬を紹介し



鳥居をくぐると石段の登り口左右に、安政二年（一八五五）に奉納された狛犬がいます。風化により全身がまだら模様のようになっています。昨形（左）の頭には角があったと思われる痕があります。たてがみは渦を巻き、尾は団扇のように広がり、するどい眼で睨み付けていますが、耳が折れて垂れていることで、かわいく見えています。

鬼の居場所

節分の豆まきで、鬼たちは退散させられました。めでたしめでたし、と思っただけで、はて、逃げた鬼はどこへ行ったのだろうかと考えてしまいました。

安易に推測するのは、人がいない山奥、さらに洞窟、そんな所かと。しかし全国には「鬼」の文字が付く地名や山名が多い。当然、鬼にまつわる伝説などがあり、それが由来となっていそうです。

ネットで鬼の文字が付く地名を検索すると、数多くありました。その中で気になったのが「鬼村」です。ストリートな地名なので、ここは鬼の里かと思いました。

島根県大田市大屋町鬼村。ここには鬼岩があります。この岩が村名の由来でしょう。さらに検索すると、ありました。鬼岩の由来が。



昔、鬼村の近くの山に鬼がすんでいた。ある時、鬼は自分の城を造りたいと思い、村人に話を持ちかけた。

「俺は自分の城が欲しい。どうだ、この村に城を造らせてはくれまいか。」

鬼が村にすみついてしまったら、村で暮らせなくなってしまう。村人は断った。断られた鬼は、城を造らせて欲しいと観音様に相談した。観音様は村

人のことを思い、無理な条件をつけて承知したふりをすることにした。

「どうしてもと言うのなら、夜明け

までに完成させることができれば、村に城を構えてもよからう。そのかわり、城ができれば二度と村人の前に姿を現すではないぞ。その時は私が許さないからな。」

観音様に許しを得た鬼は喜び、張り切って山から大きな石を運び出しては石垣を積み上げ、大急ぎで城を造り始めた。見る間に石垣は高くなり、夜明けまでに城が完成してしまふ勢いだった。その様子を見た観音様は慌てた。まさか、そんなに早く城を作り上げるとは思っていなかったのだ。

「このままでは、本当に夜明けまでに城ができあがってしまう。そうならば、村人が困ってしまうではないか。はて、どうしたものか。」

困った観音様は、鬼に夜が明けたと思わせることにした。

「コ、コ、コケコッコー！」

観音様は、鶏の鳴き真似をした。それを聞いた鬼は、夜が明けたと勘違いした。

八百万の神々

そこつわたつみのかみ
底津綿津見神

なかつわたつみのかみ
中津綿津見神

うわつわたつみのかみ
上津綿津見神

伊耶那伎神が水底で体を洗ったとき、底津綿津見神が、中では中津綿津見神、水上では上津綿津見神が化成了ました。綿津見とは海神のことで、三柱の神をあわせて綿津見三神と呼びます。

綿津見神三神の子の宇都志日金析命（穂高見命）が九州北部の海人族であつたとされる阿曇連（阿曇氏）の祖神であると記紀に記されています。

福岡市の志賀海神社は安曇氏伝承の地といわれ、また、穂高見命は穂高の峯に降臨したとの伝説があることから信濃にも安曇氏が進出しています。そのため、長野県安曇野市穂高に鎮座する穂高神社には、海がないにもかかわらず、綿津見命が祀られています。

「しまった、夜が明けてしまった。間に合わなかったか。」

鬼はつかんでいた岩を放り投げると、大急ぎで山へ逃げて行った。

それ以来、鬼は村人の前に姿を現すことはなかった。鬼が投げた岩には手をつかんだ時の指の跡がはつきり残されていた。いつしか、村人はこの岩を鬼岩と呼ぶようになり、指の跡の五つの穴に観音様や地藏様をまつるようになった。やがて、人々はこの村を鬼村と呼ぶようになったという。



結局、鬼は人里には住めないということですね。鬼はどこへ行ったのか分かりません。やっぱり、人が足を踏み入れない所なんでしょうね。

奉祝御朱印

今年には本社御祭神の御子・他戸親王の生誕一二六〇年、立太子一二五〇年に当たります。これを記念して奉祝御朱印を作成しました。

イラストには梅とモミジが描かれています。他戸親王には梅の局という妃がおられたということと、他戸親王を祀る社殿の前にはモミジの木が植えられていることによります。

他戸親王は丑年生まれで、今年は何男！ ご参拝されて御利益を戴いてください。社務所向かいにある樹齢三百年といわれる梅は二月下旬、本殿前のモミジは十一月中旬が、例年、見頃となっております。



本殿屋根葺替が

決まりました

本社の本殿屋根は、昭和五十年に葺き替えられています。檜皮は三十年で葺き替えるのが目安とされていますが、今年で四十六年が経過しようとしています。痛みが激しく、ついに本殿内に雨漏りが発生してしまいました。葺き替えや付帯工事にかかなりの額が必要になりますので、皆様のご寄進をお願い致します。詳細が決まりましたらお知らせいたします。そのときには是非ご支援いただきませうようお願い申し上げます。



上村恭子さんを
紹介します

他戸親王の奉祝御朱印のイラストは、上村恭子さんの作品です。上村さんは下北山村の住人ですが、奈良市の東大寺転害門の近くにある「旅とくらしの玉手箱 フルコト」のお店を営んでいます。フルコトは雑貨・古本のお店ですが、彼女の本業はイラストレーターです。(フルコトも本業ですが) 平成二十九年の井上内親王生誕三百年のときに本社を訪問してくれました。そのときに戴いた井上内親王のイラストに一目ぼれして、井上内親王と他戸親王を描いて戴くようお願いしたのが、今回の御朱印の絵です。彼女の描く絵には本当に癒されます。やさしいというか優雅なところか、ほっこりする一面もあれば、哀愁もまた感じてしまいます。みなさんもフルコトのホームページを開いてみてください。

Instagram @goryohongu
Twitter @goryohongu




#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ
<http://goryojinja.or.jp>

日本書紀にみる

十代 宗神天皇 (五)

四十八年春一月十日、天皇は豊城命、活目尊に勅して、「お前達二人の子は、どちらも同じように可愛い、何れを後嗣とするのがよいか分からない。それぞれ夢を見なさい。夢で占うことしよう」と言われました。二人の息子は浄沐(川での水浴や、髪を洗うこと)してお祈りをして寝ました。そして、それぞれ夢をみました。

夜明けに兄の豊城命は、夢のことを天皇に申し上げました。「御諸山に登って東に向って、八度槍を突き出し、八度刀を空に振りました」弟の活目尊は、「御諸山の頂ぎに登って、縄を四方に引き渡して、粟を食む雀を追い払いました」と言われました。

天皇は夢の占いをして二人の子に、「兄はもっぱら東に向って武器を用いたので、東国を治めるのによいだろう。弟は四方に心を配って、稔りを考

えているので、我が位を継ぐのに良いだろう」と言われました。四月十九日、活目尊を立てて皇太子とされました。豊城命には東国を治めさせるようにしました。これが上毛野君、下毛野君の先祖です。

六十年秋七月十四日、群臣に詔して「武日照命の天から持ってこられた神宝を出雲大神の宮に収めてあるのだが、これを見たい」と言われました。矢田部造の先祖の、武諸隅を遣わして奉らせました。このとき、出雲臣の先祖の出雲振根が神宝を管理していました。しかし、筑紫の国に行っていたので会えませんでした。その弟の飯入根が皇命を承り、弟の甘美韓日狭子の鷓鴣淳に持たせて奉りました。

出雲振根は筑紫から帰ってきて、神宝を朝廷に差出したというのを聞いて、弟の飯入根を責め、「数日待つべきであった。何を恐れてたやすく神宝を渡したのか」と言いました。

何年か経ちましたが、恨みと怒りは去らず、弟を殺そうと思いました。「この頃、止屋の淵に水草が生い茂っている。一緒に行つて見て欲しい」と言いました。弟は兄について行きました。兄は密かに木刀を造っていました。形は本当の太刀に似ていました。それを自分で差していました。弟は本物の刀を差して行きました。淵のそばに行つて兄が弟に言いました。「淵の水がきれいだ。一緒に水浴しようか」

弟は兄に従い、それぞれ差していた刀を外して、淵の端に置き、水に入りました。兄は先に陸にあがって、弟の本物の刀を取って自分に差しました。後からあがった弟は、驚いて兄の木刀を取りました。互いに斬り合うことになりましたが、弟は木刀で抜くことができませんでした。

兄は弟の飯入根を斬り殺しました。当時の人は歌に詠んで言いました。出雲建が佩はいていた太刀は、葛を沢山巻いてはいたが、中身がなくて気の毒であった、と。(次号につづく)

万葉の花たち

つばき(ツバキ)

河の上の つらつら椿 つらつらに見れども飽かず 巨勢の春野は 春日老(巻一・五六)

「川のほとりに椿の赤い花が並んでる。飽きることのない眺めだ。巨勢の春は。」



巨勢は、現在の御所市古瀬の辺りのこと。七〇一年の秋、持統太上天皇が、紀伊の牟婁の湯へ行幸しました。その際に詠まれた歌三首のうちの一首です。この行幸は九月のこと。椿の開花時期は春ですから、一行は実際に椿の花を見ているのではなく、春の巨勢を懐かしんでいます。万葉人は言霊信仰を持っていたため、こうして土地の名前を口にするこゝとで、その場所の聖なる力を得ようとしていたのだそうです。